

ローマ12章3-8節 「それぞれの賜物」

1A 慎み深く考える勧め 3-5

1B 信仰の量り 3

2B キリストの体 4-5

2A 賜物を用いる勧め 6-8

1B 預言： 霊の必要

2B 奉仕： 実際の必要

3B 教え： 知識の必要

4B 勧め： 行動の必要

5B 分け与え： 金銭の必要

6B 指導： 秩序の必要

7B 慈善： 肉体の必要

本文

ローマ人への手紙 12 章を開いてください。今日は 3 節から始めます。

1A 慎み深く考える勧め 3-5

1B 信仰の量り 3

3 私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりひとりに言います。だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。いや、むしろ、神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。

私たちは、ローマ 12 章に入って、キリスト者生活の実践の部分を読んでいます。1 章から 11 章までに主が示して下さって神の憐れみがあります。その憐れみに基づいて、あなたがたにお願いしますとパウロは言いました。それは、私たちの体を神に捧げるということです。そのために必要なことがあります。世に調子を合わせずに、神の御心は何か、何が良いことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知る必要がある。そのためには、思いの一新によって自分を変える必要がある、ということです。この姿勢が、私たちがこれから読んでいく 3 節以降の主の仕えていく、奉仕をするということの土台になります。

私たちは世に調子を合わせる生活を、以前は営んでいました。言い換えると、この世にある仕事や働きの価値観の中で生きていました。私たちが教会として集まる時に、2 節で言われている神の命令を守らなければ、その世の価値観をそのまま教会の中で行なっていくことになります。

しかし教会は、似て非なる存在です。人々が集まっているので、多くの人がここをサークル活動のように見なします。共通の目的があって、そのために必要な奉仕を行なっていけばよいのだという考えです。しかし教会はサークルではありません。神の福音の真理に触れて、ちょうど福音書に出てくる群衆のように、また弟子たちのように、自分の心の深くにある闇に光が当てられます。自分自身がいかに罪深いかを示されます。全人的に、神の前に自分自身を取り組みます。思いが全く変えられて、その中で主に仕えます。それが同じく信仰を持つ者たちとの間で、その関わりの中で示されていきます。ですから、共通の目的のために集まるサークルでは、自分自身を変える必要は全くないのに、ここでは変えなければいけません。

同じように、教会は会社ではありません。目に見えている成果を上げ、利益を上げることが、会社の存在目的です。そのための人材と能力が必要です。しかし教会は、むしろ弱い人々に寄り添います。成果ではなく、忠実さが求められます。また、教会は病院やカンセリング・ルームでもありません。病院は、自分の病や弱さに手当を受ける所ですが、教会は、イエス様から直接、また人々を通して魂の癒しを受けるところであります。それと同時に、「互いに愛しなさい」と主が命じられたように、主の癒しと平安を受けた者は、その癒しと平安の中で他者にもその愛を流す存在です。「互いに」という言葉があるように、受けるだけでなく、捧げるのです。その他、教会は「学校」でもありません。教える会という言葉なのですが、聖書研究の集まりではなく、知識を集める所だけでなく、生活全般において人格的交わりを、主と共に、そして互いにする所です。

このように、私たちは、サークル、会社、病院、学校など、社会の中で、その生活を営んでいます。しかし、この世と調子を合わせてはいけないのであります。心の一新、いや、正確には「思いの一新」なのですが、意識的に、積極的によく考えて、それを主の御心にかなうように変えていくという作業によって、主が私たちを用いられます。

パウロはまず、「私は、自分に与えられた恵みによって」と言っています。彼の全ての奉仕の土台は、神の憐れみであり、また神の恵みでした。奉仕と言え、何かをすることではありますが、キリスト者の生活の全ては、神の憐れみと恵みから始まっています。神がしてくださったことへの応答です。憐れみとは、本来ならば受けるべき報いを受けないで済むようにされることです。神の憐れみによって、私たちは罪の中に死んでいたのに、キリストにあって生かしてくださいました。しかし、キリスト者の生活はそれだけでは終わりません。恵みというのは、全く自分が受けるに値するのではないのに受けていることです。救いによって、私たちはキリストにある者となり、神の子どもとなって、キリストにある神の霊的祝福を全て受けました。その祝福は全く自分にはそぐわない、あまりにもすばらしい賜物なのですが、神は受けることに決められたのです。

そこでパウロは、自分が神の恵みによって、使徒となったことをこのように言いました。「1コリント 15:9-10 私は使徒の中では最も小さい者であって、使徒と呼ばれる価値のない者です。なぜな

ら、私は神の教会を迫害したからです。ところが、神の恵みによって、私は今の私になりました。そして、私に対するこの神の恵みは、むだにはならず、私はほかのすべての使徒たちよりも多く働きました。しかし、それは私ではなく、私にある神の恵みです。」神の恵みによって使徒となっているので、それゆえ、今、ローマにいる兄弟たちに指導をし、指示を与えています。

そして、「あなたがたひとりひとりに言います。」と言っています。「あなたがた」というような、総合的なものではなく、一人一人が関わっているもの、それぞれが個人的に受けとめなければいけないこと、ということです。なぜならこれから、パウロは、教会における御霊の賜物を用いることを教えるからです。教会において、「お客さん」は一人としていません。全て、一人一人が関わっています。そのために、この言い回しを使っています。

そして 2 節の中心は、「だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。」であります。思いを新たにすることにおいて大事なものは、「自分自身」をどうみなしているか？であります。先に挙げた教会はサークルではない、学校ではない、会社ではない、病院やカウンセリング室ではないなど話しましたが、この世にある制度は全て「自分を高める」ことが中心になっています。もちろん、それら一つ一つが神の一般的な憐れみによって、神にとって立てられている制度であります。しかし、そこにある哲学は自己実現であったり、自己愛であったり、「自分」が中心であり、自己を高めることが中心です。その部分が、福音の真理に触れると、徹底的に示されるわけです。なぜそうなっているのかと言いますと、この世の神はサタンだからです。使徒ヨハネは、「私たちは神からの者であり、全世界は悪い者の支配下にあることを知っています。(1ヨハネ 5:19)」と言いました。サタンの墮落は、自分を高めることです。「私は天に上ろう。…いと高き方のように上ろう。(イザヤ 14:13-14)」という、自分を高めることが彼の特徴です。したがって、世にも「自分を高める」という流れ、哲学、思いがあります。

ローマ 12 章には、後半 9 節以降に、「愛」について話しています。自己を高めることの反対が、「愛」であります。神の愛、キリストの愛が留まっている時に、自分というものは中心になりません。そして、「思いを働かせる」ことの重要性も続けて語っています。10 節には、「兄弟愛をもって心から互いに愛し合い、尊敬をもって互いに人を自分よりまさっていると思いなさい。」とあります。16 節にも、「互いに一つ心になり、高ぶった思いを持たず、かえって身分の低い者に順応しなさい。自分こそ知者だなどと思てはいけません。」とあります。ここで大事なことは、思い上がることと、卑下することは表裏一体だということです。モーセが主から預言者に召されて、「私は口べたです。」と言い訳して、その召命を断った時には、主がろばのような口でも用いられるという恵みを拒んでいたのですから、これもまた一種の思い上がりなのです。主の恵みを受け、その賜物を受けている時に、私たちは積極的に賜物を用いて、自分を忘れて与え続けるのです。

そして、「いや、むしろ、神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考

え方をしなさい。」慎み深いというのは、思慮深く、しっかりと現実を見て冷静に判断する、ということです。信仰が与えられていないのに、信仰があるかのように振る舞うことがありますね。サムエル記第一に、ペリシテ人との戦いでイスラエル人たちが神の箱を持っていけば、それで勝利できると思っていました。自分たち自身に偶像があり、そして神の箱までを何かお守りであるかのように偶像視していた問題があったのです。けれども、二十年ぐらい経て、ようやく主を求め、自分たちの間にある偶像を取り除き、へりくだった時に、ペリシテ人が戦いを挑んで来た時に、サムエルが必死になって祈って、それで主が戦ってくださいました。

「神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量り」とあります。私たちが救われのは、神の恵みによって、信仰によってであります。神に対する奉仕も恵みによって、信仰によってであります。多くの方が、賜物を「能力開発」のように考えます。自分の内にある才能を発見して、それを培い、養うことだと思っています。いいえ、それは間違いです。それを行なうと、「自分がいかにこれだけ神のために働いたのか、人々は認めない。」ということになるでしょう。報酬を求めるようになり、イエス様が喩えで話された、五時から雇われた者たちが同じ労賃を受けたことを理解できなくなります。むしろ僕は、「私はやらなければいけないことを、やったまでです。」と答えるものです。私の父は、接客業に努めていました。結婚式の誓いをすると、とても光っていました。しかし、教会でそれがうまくいかると言う、正反対でした。彼は苦しみました、砕かれていきました。それで砕かれてきた時に、主は教会の奉仕に用いられました。

信仰というものは、それ自体が神の賜物であるし、また自分の意志で働かせなければいけないものです。信仰によるので、自分でやっているという意識が少ないです。ただ神を信じ、キリストを信じているだけであり、それを行なっていることを意識していることが少ないです。これは神の賜物だからです。

そして、自分の意志を働かせなければいけないのは、その奉仕には目に見えることが少なく、目に見えないものを信じなければいけないからです。まず、賜物を下さる神がおられることを信じないといけません。そして、御霊の賜物があることを信じないといけません。自分には、神からの超自然的な賜物はない、と言われるのであれば、自分の救いが超自然的なもの、奇蹟であることを否定しているに他なりません。それから、聖霊がその賜物を用いる私たちを導き、支配されていることを信じる必要があります。モーセに対して、投げた蛇のしっぽを掴みなさいと言われた時に、モーセはその命令に従う必要がありました。人間の理解では、蛇は尻尾を掴めば、噛まれるからです。けれども聖霊が導かれると信じて、言われたとおりに行なうのです。そうして、モーセの場合、蛇が杖に戻ったのです。そして、御霊の賜物を用いる目的を信じないといけません。それは、何度もお話しますが、教会全体の益になるためであり、自分が高められることとは関係のないことです。コリント第一 12 章と 14 章には、異言の賜物がありますが、それが唯一、自分の徳を高めるために用いられる賜物と言ってよいかもしれません。それ以外はみな益になるためのものであり、

自分を高めるものではないのです。

2B キリストの体 4-5

4 一つのからだには多くの器官があって、すべての器官が同じ働きはしないのと同じように、5 大ぜいいる私たちも、キリストにあって一つのからだであり、ひとりひとり互いに器官なのです。

教会の本質とは何か？それが、サークルでもなく、会社でもなく、病院でもなく、学校でもない、では何か？なのですが、パウロは「キリストの体」としました。キリストを頭として、私たちがそれぞれの器官であり、一つの体を成しているということです。私たちは、キリストが頭であるということには、異論はないでしょう。それぞれが、イエスが主であると呼び求め、その告白によって救われているからです。しかし、キリストを主とすることは、それがそのまま御霊によって一つの体の一部になっているということです。自分がもはや、自分だけのものではなくなっている。キリストのものとなっていて、そしてキリストのものとされている者たちのものでもあります。ここに個人主義はありません。

体の特徴は、「一つになっている」ということです。奇形児で、二人の子が腹か胸の辺りで分離されず生まれてきたという双子がいますね。彼らは絶えず、全てのことをするのに協力せねばならず、考えないといけません。大変だな、と思うかもしれませんが、私たちはそれ以上です。頭が二つあるのではなく、キリストという頭が一つしかありません！この方の権威に服することによって、私たちの賜物と奉仕に、麗しい一致が与えられるのです。

他の箇所では、教会は神の家族であり、神の建物ともあります。家族も切っても切り離せない関係であり、切り離せば痛みを伴います。建物は一つの部分が独立して動けば、建物自体が崩れてしまいます。御霊によって一つにされた者たちであり、一致があります。一つということ、パウロは熱心に次のように説明しています。「エペソ 4:2-6 謙遜と柔和の限りを尽くし、寛容を示し、愛をもって互いに忍び合い、平和のきずなで結ばれて御霊の一致を熱心に保ちなさい。からだは一つ、御霊は一つです。あなたがたが召されたとき、召しのもたらした望みが一つであったのと同じです。主は一つ、信仰は一つ、バプテスマは一つです。すべてのものの上にあり、すべてのものを貫き、すべてのもののうちにおられる、すべてのものの父なる神は一つです。」

もう一つ、体の特徴は有機的だということです。それは命であり、人間の組織のような細分化はできません。私たちアジア人のほうが、西洋人よりも、その感覚は優れています。東洋医学においては、一つの症状についてそれだけに注目するのではなく、絶えず体全体のバランスを考えます。私たちの足指に何か落ちて痛みが走ったら、体全体に痛みが走るのと同じです。「1コリント 12:25-26 それは、からだの中に分裂がなく、各部分が互いにいたわり合うためです。もし一つの部分が苦しめば、すべての部分がともに苦しみ、もし一つの部分が尊ばれば、すべての部分がともに喜ぶのです。」ですから、人間の組織のように考えると教会が分からなくなります。

そして、体の特徴は、ここでパウロが強調している、「すべての器官が同じ働きはしない」つまり、多様性だということです。私たちは、おのおのに主から任された分があります。それをきちんと、しっかり行っていきます。他の人たちがしていることに、自分がただそこに入っていけば、全てが目ではないのに、全てが目になろうとするという現象が起こります。そうではなく、自分に与えられた分をわきまえして、それぞれが異なる働きや賜物があるのですが、その人たちと自分は一つに結び合わされ、つながっているのだということを知る必要があるのです。

2A 賜物を用いる勧め 6-8

パウロはローマ 12 章では、そのそれぞれに任された分をしっかりと果たす、行なっていくということを強調し、具体的に七つの賜物を列挙しています。

1B 預言：霊の必要

6 私たちは、与えられた恵みに従って、異なった賜物を持っているので、もしそれが預言であれば、その信仰に応じて預言しなさい。

パウロは再び、「与えられた恵みに」と強調しています。そして、「もしそれが預言であれば」と言っていますが、「もし」という言葉よりも、「であれば」のほうに強調が置かれているギリシヤ語です。ですから、6 節から 8 節で強調されているのは、「これから賜物を得る」ということではなくて、「すでに与えられている賜物を、しっかりと用いていきなさい。」ということです。これは、とても大事な点です。先ほど話したように、「自分の賜物は何だろう？」とあまり悩まないでください。パウロがここで強調しているのは、「実践しなさい、用いなさい」ということです。自分の手、自分の足、また自分の頭があります。これを主の教会のために使いなさい、ということです。

預言が筆頭に賜物の中で列挙されています。これは、神から言葉を預かるということであり、教会が神の預言あるいは言葉によって生きていることを如実に教えています。主は、ゆえに旧約時代の古来から、預言者を立ててイスラエルの家を建て上げられました。そして御子ご自身が、預言されました。そして新約において、預言者がいました。アガポなど、預言者の務めを持っている者たちがいました。またコリントにある教会を見ると、かなり多くの人々が預言を語っていたように思われます。その秩序を持たせるために、コリント第一 14 章に預言の賜物を求める時の指針が書かれています。

パウロは、「その信仰に応じて預言しなさい」と言っています。自分でも、これでよいのかどうか分からないということがあります。エレミヤは、バビロンによってエルサレムが滅ぼされることが分かって、それでいて親戚の土地を購入して、「再びユダヤ人が土地を購入するようになる」と預言しましたが、「主よ、どうしてですか？」と叫びました(エレミヤ 33 章)。主が御霊によって語ってくださる時に、それがどのように成就するのか分からない、不確かなこと、また自分自身にも不都合なこと

があります。けれども、信仰によって語るのです。パウロは、「御霊の賜物、特に預言することを熱心に求めなさい。(1コリント 14:1)」と言いました。それは、徳を高め、勧めをなし、慰めを与えます。説教壇から御言葉を取り次ぐ私だけが、預言の賜物を用いているわけではありません。互いの祈りの中で御霊によって示されたことを、大胆に祈ったり、主から与えられたことを交わりの中で語ったり、聖霊の賜物を豊かに与えられ、それらを用いることはとても良いことです。

2B 奉仕： 実際の必要

7 奉仕であれば奉仕し、教える人であれば教えなさい。

奉仕とありますが、これは具体的な仕えるべき事柄のことです。教会において、全てが霊的な奉仕ですが、預言のような目に見えない霊に関わることもあります。さまざまな実際の事柄があります。掃除をすること、会計をすること、台所に立つこと、椅子を並べることなど、いろいろあります。これらを行なうのです。ある意味も、これらも全ての人が召されていると言ってよいのではないのでしょうか？主に仕えることは、全ての信者がすることですから。

3B 教え： 知識の必要

そして「教える」ことですが、これは「神や神の計画について、その知識を伝える」ことであります。教えることについて、自分ではできないと思われるかもしれません。いいえ、これも神の知識が与えられている人であれば、持っていない人に教えることができます。

4B 勧め： 行動の必要

8 勧めをする人であれば勧め、分け与える人は惜しまずに分け与え、指導する人は熱心に指導し、慈善を行なう人は喜んでそれをしなさい。

「勧め」とは、「人が行動できるように励ます」ということです。知ってはいるけれども、なかなかできない、というような時、行動に移すのを助け、励ます言葉であります。私のように教えることだけでなく、教えられていることを行動に移すように勧める人がいることは、教会に不可欠です。

5B 分け与え： 金銭の必要

そして「分け与える」ことについては、金銭の必要であります。主に捧げるのですが、特別に示されて捧げます。私たちは今日、あるアメリカ人の夫婦から、「毎月の支援をやめることにしました」と連絡を受けました。2000年辺りから毎月、ずっと支援してくださったのです。これはすごい大きなことです。分け与えることも、すべてのキリスト者がすべきことですが、恵みによって、御霊の助けによって捧げます。その時に大事なものは、「惜しまず」にということです。これは、「ただ主に捧げて、それによって何かを期待しない」ということです。何か条件を付けたりすることをしないことです。

6B 指導：秩序の必要

そして、「指導する人は熱心に指導し」であります。教会の秩序の必要があります。秩序と平和がなければ、私たちは安心して主にあって育つことはできません。「1テサロニケ 5:12-13 兄弟たちよ。あなたがたにお願いします。あなたがたの間で労苦し、主にあってあなたがたを指導し、訓戒している人々を認めなさい。その務めのゆえに、愛をもって深い尊敬を払いなさい。お互いの間に平和を保ちなさい。」熱心に、とありますが、いやいやながらではなく、ということです。勤勉にということです。怠けてはいけない、ということです。

7B 慈善：肉体の必要

そして、「慈善を行なう人は喜んでそれをしなさい。」とありますが、これは弱まっている人々への具体的な助けのことです。貧しい人、病んでいる人に対して特別な憐れみがある人のことを言います。「喜んで」とあるように、これを義務感から行うのではなく、本当に喜びとして行ってください、ということでもあります。